

まえがき.....五

第一部「目指すところ」.....三

一 アマチュアと音楽.....五

二 ピアノ曲の階段を登る.....三

三 最終の目標.....六

第二部「辿る道」.....五

一 必要なもの.....七

二 練習は楽しい必要事.....四

三 楽 曲.....九

A 楽曲を選ぶには.....五〇

B 最も弱い部分を最も強い部分に変える.....六六

C 語 譜.....六六

D 語譜の後——保持.....三三

E 人の前で弾く事.....三九

F 「次には何を習おうか」.....四四

四 テクニク.....四四

A スケールとアルペジオ.....四四

B 特殊練習.....四五

五 初見演奏.....四三

六 名曲十種について.....四八

附録一 複合リズムの問題の解き方.....三七

附録一 目 録.....四一

訳 註.....三五

あとがき.....三六

まえがき

ピアノを弾くという事は、私にとつて、妻の次にならぶ大きな喜びである。それは、私の職業に次いで、強い興味をひく。趣味生活というものが私の生活全体に対して持つべき地位は丁度そうあるべきだと思う。私は三十六歳になる。その内二十六年は音楽によつて輝かしくされ又豊かにされた。

それだからこそ、此の本は最も暗示に富むように書かれたものである。この中に私は音楽——殊に高貴にして独立性のある、かのピアノから引き出し得る無限に変化の多い音楽——に対する消し難い熱情を語ろうとした。これは私見の書である。——というわけは、素人のピアニストの前に拡がるフィールドは非常に広大なものだから、それについてどんな本を書くとしても、それは、たかだか、このフィールドを楽しく且つ忙がしく逍遙した一人の素人の遍歴記を告げ得るものでしかないからである。

私は、私の経験が、三つの大きいグループの成人の人々に対して考えと行動の糧とを与える様

に希望する。三つのグループと言うのは、今迄ずっとピアノを弾いていた人でその演奏を向上扱大しようと思ひ人々、幼い頃ピアノを習つて中止したけれどまた新しく続けたい人々、及び始めてピアノを弾こうという人々である。

つい近い頃の或る晩、私は毎日のピアノ練習の時間を終つてから、ふと、こういう驚くべき事実に気がついた。世の中には、私の様にピアノを弾く事を好み、また私の様に、ピアノをもつと多くもつと上手に、このさき一生弾きたいと思つている数万数十万の男女があるのだ。それで私は、この事についての私の考えを集めて見よう。——それと、ピアノの名人たちや優れた教師たちが書いた事、語つた事で、教示するところや鼓舞するところの多いもの、及び具体的に有益なものを集めてみようと思つた。其の結果がこの本なのである。この本が読者にとつて有益でありまた読者がそれを好んでくれる事を私は心から熱望する。

読者が弾く人であるか、或は弾いた事のある人であるかの場合、この本はその弾き方を向上させ、また拡大させるプランを提供するのである。そのプランは実際的なものであり、私にとつて実際に役に立つたものである。

これまでに弾いた事はないけれどこれから弾きたいという人に対しては、もちろん教師が必要である。然しこの本は、その進歩を助ける役に立つであらう。

これから始める成人の方たちは、先ずこの本の短い第一部「目指すところ」を見て、素人のピアノリストが常識的に何処まで期待出来るかについての概観（それは快い驚きを与える事と思うが）を捉えて頂きたい。その後でこれ等の方たちは、やや長い第二部「進る道」を読んで頂きたい。年をとつてからピアノを習い始めるのは遅すぎる様に考える人々には、次の意見を御紹介しておきたい。「習う人の年は幾つでも構わない。素質があり知能があれば年齢は妨げとならない。若しも音楽上の一般的な素質に強く恵まれていれば、其の人は才能の劣つた若い人達よりも優れた結果を得る事が出来る。」これはヨーゼフ・ホフマンの言葉である。(註一)

私は十歳の時ニューヨーク州クーパースタウンの私の家で姉ルーシー・クックのピアノを熱心に聴く様になつた。姉は今でもそうだけれど、その頃からピアノを美しく弾いた。例えば、彼女の弾くベートーヴェンの悲愴奏鳴曲は何時も私を感激の霧の中に誘い込むのだつた。あの奏鳴曲を弾く事は、人間にとつて最も値打のある、そして輝かしい事業の一つであると私には思われた。その考えは今も変つていない。

私が十一歳の時に、やさしい伯父さんが私にクリスマスプレゼントとしてピアノのレッスンを

させてくれた。私はそのレッスンについてすべてを楽しんだが、自習は大いに苦手であつた。しかしそれも、当時クーペースタウンのノックス学校の音楽主任をしていたキャスリン・ルース・ヘイマン女史に教わつた幸福な時期だけは別であつた。この優れた芸術家は、スクリヤービンの作品の演奏によつて世界に知られていたが、この女史から習つた二年間は、私は自習する事さえも楽しんだのである。

大学時代と、ニューヨーク市に住んだ十六年間の中の前半は、私のピアノ練習に対する興味は眠つていたが、八年前、有名なピアノリストでニューヨークの音楽研究所及びジュリヤード音楽学校で教えていたジェームズ・フリスキン氏の個人教授を受ける幸福に恵まれて以来、俄然その趣味が目覚め、それが永続したのである。

一九三〇年に私は「ニューヨーク」誌に入社して記者となつた。この職業はそれ以来ずっと私の生計を支えている。これほど面白い仕事は世の中に無いと思う。中でも最も面白かつたのは「ニューヨーク」誌上の「街の声」のストーリーのためにピアノの名手たちをインタービューした事であつた。「ニューヨーク」誌の記事を面白くする為に、私は何時もピアノの名手たちに趣味の事を尋ねた。ホフマンは、自分の小さな機械仕事場で発明をするのが何より楽しいとい

う事であり、ホロヴィッツ(註三)は彼のロールスロイスを全速力で飛ばす事を好み、ローゼンタール(註四)はチェスを闘わせる事と形而上学を思考する事を喜び、シュナーベル(註五)は水泳とテニスをやり、プライロフスキー(註六)はドストイエフスキーやバルザックやヴァン・ダインをみな原語で読む。しかし——これは「ニューヨーク」誌の編集長には内緒の事だが——私は何時もそのピアノリスト達から私の趣味について極めて有益な、然し、技術に関係のない記事にとつては全然役に立たない話を聞く事を常としていた。その事は、この本の読者には大変有益である。私は、それをすべてこの本の中に用いたのである。

私はこの本の中で、ことさらに楽曲を第一におき、テクニクを第二においた。これは専門家になる目的で習う順序とは逆であるけれど、趣味としてピアノを漸進的に習う事に対する楽しみを増そうという考えからである。といつて、テクニクを低く見るわけではない。

高度にテクニクを習う事は、その人の曲目を確実にし、かつ拡大する為に私が主張するとこのものである。建築学者の言う様に、その素材は作品の実体なのだから有用なのである。その上、この本にはスケール、アルペジオ及び特殊な練習を多くし、数年かかる程の材料を盛り込んでいる。しかしこの本では音楽が第一で技巧が第二である。素人の演奏家は専門家の大多数より

も、弾く事に関して、ずつと幸福である事を忘れてはならない。素人に対しては嚴重な練習の努力は要らない。責任感の重荷もない。激しい競争もない。演奏会場の構造や、音響状態や、自分自身の気持を無視してまで聴衆にまみえねばならぬという義務もない。素人にとつてはこの仕事は他の趣味と同様に喜びであり、その結果は、自分自身や同好の士や同情的な聴き手にとつても満足なのである。その為に費す時間は一日一時間でよい——趣味に使う時間としては決して多い方でない。勿論この時間を伸ばしたければ（そうして伸ばし得るのだが）是非とも伸ばすのがよい。

然し一日一時間ずつピアノに向つて組織的に稽古すれば、誰でも数年間に弾き方を全く変えてしまふ事が出来るといふ事を私ははつきり知つてゐる。

素人のピアニストがどの位夥しい数であるかについて考えてみるがよい。言う迄もなく、素人の音楽家ではピアノを弾く人が他のどんな楽器を弾く人より多い——恐らくは他のすべての楽器を合わせたより多いであろう。ピアノのある知人の家を考え、ヴァイオリンやチェロやヴィオラやフルートやハーブのある家、またはよい声の歌い手の居る家を考えてみるがよい。百年以上の昔から世界中を通じてピアノは標準的な家庭楽器であつたし、今ではピアノはこれ迄のどの時代

よりもポピュラーになつてゐる。アメリカ合衆国に於けるピアノの売上高は今が最高である。アメリカ合衆国だけでも毎年十五万台のピアノが売れてゐる。「ニューヨーク・タイムズ」紙の音楽批評家オーリン・ダウンスはこの程こう書いた。「ピアノが大きな未来を持つ事を私は断言する。その未来は、音楽の上から言つて、この最もポピュラーで且つ有用な楽器が過去に持つていたよりも遙かに大きいものである。」

アップライトピアノでもグランドピアノでも、又前からあるのにしろ新しく買つたのにしろ、それは文字通り宝の箱である。尽きる事のない贈物を与えようと待つてゐるものであり、その周囲の生活を高め、かつ豊かにするものである。アントン・ルービンシテイン（註）は、老年円熟の境に至つて、次の様な至言を吐いた。「ピアノは愛らしい楽器である。貴方はそれを愛し、その響きを愛し、そして、それが貴方に対してもつと愛らしくなる様に優しくしてやらねばならない。其処に」——と言つて彼は手をピアノの上へのせ——「神聖な美がある。」

一 アマチュアと音楽

「ニューヨーカー」誌における私の仕事の一部として、私は探検家スタンリー氏の役廻りをして
いる。私は人知れぬ島々を探り、フテリー通りとかイズナガ広場とか言うような奇妙な名のつい
た街路をあさり廻る。この為に私は変な立場に追い込まれるような事も度々あつた。然し奇妙であ
るといふ点から言えば、私の十年間の記者生活の中に見た幾つかの趣味ほどのものはなかつた。

私は「コリヤー」誌の各号に於ける総ての広告の掲載場所と内容を暗記している人をインタ
ービューした事がある。もちろん彼は毎週次の号のを覚える為に、この役にも立たぬ知識を捨て
る事に忙しかつた。私は、八室のアパートの一室に住んでいて残りの七室をへボ雑誌で一杯にし
ている人物をインタービューした事がある。彼は、アメリカ中のあらゆるへボ雑誌を年ぎめで購
入し、一行も読まずに、彼の財布が空になつて行くのと反比例に洪水の様に増加する雑誌の中に
溺れて行くのであつた。私は、子供の時からスクーターに乗る事を好んで七十幾歳になつても未

だスクーターに乗る上品な老婦人をインタービューした事がある。この老婦人はスクーターで巧みにブルックリン橋を渡りブロードウェイを五十七丁目の銀行まで行つて、また橋を渡りブルックリンの家へ帰つて行く。私は、詩を書くのが趣味である医師をインタービューした事がある。

この先生は、インタービューの時すでに五万以上の詩を書いており、その中には驚くべきよい詩もあつた。この善良な医師は、丁度我々が目ばたきをせずにはおられないのと同じ様に、詩を書かずにはおられないのだつた。然も、彼は有名な精神病学者で、その専門は患者の衝動を癒す事であつたのだ。こういう多くの例を挙げたのは、世の中には度を越えた趣味があるという事を示す為である。私としては度を越えた趣味は好まない。(第一に)仕事と(第二に)趣味との釣合のとれた生活を好むのである。兎に角、こういう極端な例は、強い興味というものがどんな驚くべき結果を生み出すかを示すものである。然し、我々は趣味を使うべきであつて、趣味に使われべきではない。我々のピアノに対する興味も、適度なものであり知的に統制されそうして我々の生活全体と釣合うようであらねばならぬ。

一日一時間でも、それが永続され不可抗力による場合以外は必ず行われるとしたならば、それは奇蹟的なものを生み出すだろう。一時間練習しそれから三日間休み、その後で追いつく三時間の練習をするという様なやり方は、一日一時間ずつやるという、より易しい習慣を幾年も続ける事からみると遙に能率が悪い。勿論、この一時間は集中された一時間である。その間は他の事を一切考えに入れない。その間は、自分の出した音をあたかも他の人が出した音でもあるかの様に傾聴し批判するのである。ピアノの練習は量よりも質が大事である。長時間の練習をやつて指だけはキイを叩いても心がボンヤリしている様なやり方でなく、集中された能率のよい一時間を探りたい。私がここに、ピアノを練習するのに一日一時間を費すべきだと主張するのを、一日六十分という丈の意味であると誤らないで頂き度い。私は、一日一時間ずつの仕事を意味しているのである。この仕事というのは、何かの趣味をやつている人が楽しんでそれに費す努力の意味である。この仕事以外に——自分の為、又は他の人々の為、又は他の人々と共に——遊ぶ機会が多ければ多いほどよい。毎日一時間の仕事の目指すところは、ピアノを毎月々々毎年々々より上手にするという事である。

ピアノが上達するに従つて友達サークルが大きくなる。これは太陽が昇るのと同じように確実な事である。音楽は、新しい気の合つた永年の友達を必ず作る力強い磁石である。アマチュアピアニストの生活の中に於ける音楽の位置は重要ではあるけれども、何物にもまして重要で

あると言ふべきではないと私は考える。それは、仕事をなし得たという事と、それに依つて得たものから来る喜びの源であり、更に、美とそれから「立派さ」とも言えるような事の常に拮がりつつある源なのである。

ヨーロッパは、最初の暗黒時代から第二の暗黒時代（即ち現代）迄の長いそして収獲多い時期に、アマチュア音楽家を万を以て数えるほど生み出した。その人々は、アマチュアと言ふ言葉の直訳通りに、たゞ「音楽を愛する人」であつたが、同時に、彼等は殆んど専門家のような熟練した演奏家であつた。ハイドンのパトロンであつたニコラス・エステルハージイ公はバリトンという弦楽器（ヴィオラ・ディ・ボルドーネともいう）の名医であつた。ロシアの貴族の中にはピアノ・ストとしての練達を誇る人々が多くて、あの大ピアノ・ストの父であるワシリイ・ラフマニノフもその一人であつた。アマチュア音楽についての当時のヨーロッパ人の考え方を示す良い例に、ルイ十四世に仕えた宰相フーケーが言つた言葉として、マルク・ハンブルグが伝えた次の話がある。フーケーが或る時音楽愛好者でない一人の宮内官に向つて「君は音楽が好きでないのかね。クラヴァンを弾かないのかね。それはお気の毒だ。君は退屈な晩年を迎えるように自分で仕向けているのだよ。」と言つたというのである。別な大陸で別な世紀にあつた例を言えば、ヴェネスエラ

国の首府カラカスの都に於ける最も優秀なアマチュアピアノ・ストは大蔵大臣マヌエル・アントニオ・カレリーニョで、その小さい娘がテレサ（譯註七）なのである。勿論、今日の我々アメリカ人はよい音楽を聴く機会の多い事についてはヨーロッパ諸国とは比較が出来ない程になつている。日曜日を例にとつてみよう。ニューヨーク附近に住む音楽愛好者はWQXR局が何時でも聴ける。ダイヤルをこの優秀な局なり或は大放送網などの局かに向ければ、夜明けから夜半迄の間に、交響曲全曲を半ダース位と、協奏曲を四つか五つと、交響詩や聖譚曲や交声曲を三つか四つ、ミサの全曲を一つ、歌劇の全曲を一つ、それからピアノ、ヴァイオリン、チェロ、声楽のリサイタルを一ダース位、その他に十五分或は三十分の室内楽を幾つか聴く事が出来るであらう。WQXR局の恩恵に浴していないアメリカ一般の地域でも、NBC交響楽団やカーネギー・ホールからのフルハモニー交響楽団の日曜午後の演奏や、メトロポリタン歌劇場からの土曜の午後の演奏を、他の色々な音楽の定時放送と共に聴く事が出来る。最も正直に言つて、また最も謙遜に言つて、地球上の何処でも、或は歴史上のどの頁にも、これほど豊富に音楽を押しつけられている国の例があるであらうか。然もそれは演奏会へ行くのでもなく、自宅に愛好者たちを集めるのでもなく、単にスイッチをひねる丈の手数でそれが聴けるのだ。それに加えて、今日ではレコード音楽の驚

くべき大発展があるのだから、ヨーロッパがその音楽の最も盛んな時に与える事が出来たものといえども、現代アメリカが提供している音楽を聴く機会に較べたら、もの数ではないのである。

ラジオとレコードを通じて高級音楽が最近飛躍的に増加した事の自然かつ避け難い結果として音楽をやる人が非常に増加した。それは我々の心に深く潜む音楽への欲求——ジャワの太陽の下を歩む直立猿人が、始めて口笛を吹いたその時代から在る欲求——を満足させる。直立猿人は驚きかつ喜んで「ここらの旧石器時代の鳥の鳴く声にボンヤリ耳を傾けるよりは、この口笛の方がずっと面白い」と思つた事であろう。我々は、ピアノやヴァイオリンを弾き、或いは歌い乍ら「ぼんやりダイヤルを廻したりレコードを回転盤にのせたりするよりは、この方がずっと面白い」と考える。

シカゴにはビジネスメンズ・オーケストラというものがあつて、これは会社の社長、重役や医者や歯医者や弁護士たちから成り立つてゐる。ナショナル放送会社は「音楽は私の趣味です」というプログラムを数年間出してゐたが、これは優れたアマチュアピアニストのウォルター・E・クーンズが企画し演出したもので、このプログラムの中でアインスタイン(論註八)やヘンドリック・ヴァン・ルーン(論註九)がヴァイオリンを弾き、コマーシャルナショナル信託銀行の副社長が独唱をし、ブランチ・キャベルの従兄のハートウェル・キャベルがピアノを弾いた。

優秀なアマチュアピアニスト達の表を此処に掲げるとしよう。きつとそれは読者を驚かせ力づけるに相違ない。上記のキャベル氏の他に舞台のキャスリーン・ヘップバーンとキャスリーン・コーネル、「リチャード二世」の名優モーリス・エヴァンス、ハリウッドのフレッド・アステア、アドルフ・マンジュウ、チャーリー・チャップリン(チャップリンとアインスタインはピアノとヴァイオリンと両方弾く)、コーネル大学の電機工学の教授で其の道ではシュタインメツツ以来の最大の学者と言われるウラジミール・カラペトフ、フランスの首相を三度つとめたエドアール・エリオ。サイモン・エンド・シュスター出版社のリチャード・L・サイモン(訳註、この書の原出版者。この部分にサイモン氏は「トル」と記入し原著者が後から「イキ」と記入したと原書に御愛嬌の註がしてある)。それからニューヨーク州警察長官ジョン・A・ワーナー。この人はカーネギー・ホールでニューヨーク・シテイ交響楽団と共にラフマニノフの第一協奏曲を弾いた。退役海軍少将R・E・ベイケンハス、漫画家のビーター・アーノ、提琴家のフリッツ・クライスラー、それから文筆家のエリオット・ポール、マニユエル・コムロフ、ジョン・アースキン、ロバート・ネイサン、ジョン・セルビ、J・B・ブリーストリー、H・L・メンケン。

次に記すイグナツ・ヤン・パデルフスキの言葉について考えてみよう。

「総ての中で最も美しい芸術である音楽は、常に教養上の利益と共に魅力を持つてあろう。音楽は、家庭の幅を拡げて行く上の最大の力の一つである。余りに多くの学習者が名人巨匠にならうとして音楽を学んでいるが、音楽はそれ自身の為に学ばれなくてはならない。音楽を学ぶ事のもたらす知的習練は非常に大きな値打を持つもので、それに代り得るものはないのである。なお、音楽を学ぶ事は、後年に至つて名曲を理解するという限りない満足を与える事となる。」

その上、弾く事が上手になるに従つて、色々のものを沢山弾く事が出来る。音楽で色々のものを沢山弾く長い生活を私は推奨する。空腹な牡牛が野原で新芽を食べて行く様に、ピアノ音楽の色々な頁を探るがよい。ピアノ曲に対する親しみを広くする為に、色々のものを沢山弾くのがよい。学ぶべき新曲を選定する為にも、色々のものを沢山弾くのがよい。曲全体としては技術的に自分の手に負えないような名曲の部分自分の力の範囲で弾きこなせるようにする為にも、色々のものを沢山弾くのがよい。閑つぶしの為にも、色々のものを沢山弾くのがよい。自分で楽しむ為にも、色々のものを沢山弾くのがよい。色々のものを沢山弾く為にも、色々のものを沢山弾くのがよい。

二 ピアノ曲の階段を登る

私はピアノ曲を大きな階段の様なものと考えてる。その一段々は財宝を積み重ねた慾ばり男の棚なのである。これは寧ろ内輪な見積りであつて、交響楽曲でさえもピアノ曲よりも多くはない。「英雄」とか「第五」とかいう事を言われたら私も敬意を表するが、私の方からも「熱情」や「作品一一一」があると言おう。「モーツァルトのジュピター交響曲」という声には「シューマンの短調奏鳴曲」と私は答える。「ブラームスの第一」には「シューベルトのハ長調幻想曲」。こういう対談は幾時間も続けられる。私の方が先に名曲の種切れになるという事はないであらう。

ここにアマチュアピアニストにとつての激励と示唆とがある。名曲は低い段から最上の段までらくに弾けるものから歯のたたないものまで、総ての段階を埋めている。それと共に、小曲だけれどなお注目に値するという作品も甚だ多い。どの段にある人でも、次の段へと登る技術をゆつくりと蓄え乍ら、その段にいる事を——勉強しつつ、色々弾きつつ、楽しみつつ——よろこぶで